

『新エロイーズ』における夢想の道徳的機能

井 上 櫻 子

ルソー研究において、文学的研究と思想的研究はこれまで個別になされる傾向にあり、結果として、ルソーにおける思想と文学創造との繋がりを見えにくくしてしまったと言える。このような研究上の問題点が最もはっきり現れるのは、殊に『新エロイーズ』の読解においてである。『新エロイーズ』の執筆期は、百科全書派と訣別したルソーが独自の人間論を構築する時期であり、ルソーの思索の深まりに従って、『新エロイーズ』も純然たる恋愛小説から思想的著作へと変貌する。より具体的には、『新エロイーズ』において、ルソーは百科全書派の道徳論とは対照的な道徳論を提示している。本論では、『新エロイーズ』の考察を通してルソーに於ける文学と道徳思想の関係を浮き彫りにすることを目的としたい。

ルソーにおける夢想については、これまで主に思想的見地からよりも文学的見地から研究がなされてきた。これらの研究の多くは、『孤独な散歩者の夢想』を始めとするルソーの自伝に考察の焦点を当て、この作家における夢想の重要性を、孤独を愛する彼の性格によって説明づけようとしてきた。従って、ルソーの夢想については既に多くの研究がなされてきたにもかかわらず、ルソーの人間論において夢想がどのように位置づけられるかと言う問題については、未だ体系的な研究がなされていない。夢想の概念がルソーの思想体系に組み込まれていくのは、既に指摘されてきているように『新エロイーズ』執筆期である¹⁾。ルソーの人間論の発展期に書かれた作品における夢想の機能を考察することで、ルソーの夢想と人間論との関係を明らかにすることが出来ると考えられる。

『新エロイーズ』における夢想については、すでにモリセによって研究がなされている²⁾。しかし、彼の研究は専ら小説の筋を重視しながら行われ、夢想の機能について文学的見地から分析を試みている。ここでは、『新エロイーズ』における夢想を思想的見地から検討し、道徳的感受性と夢想との関係を明らかにすることを目的としたい。そのため、作品中、ルソーの人間論の発展を最も強く反映したクラランの共同体に関する書簡に焦点を絞り、考察を進めたい。

1. 『孤独な散歩者の夢想』にみられる夢想

まずルソーの夢想の特徴をより明確にするため、簡単に「夢想」についての概念の変遷を辿っ

ておきたい。16, 17世紀において夢想は「狂気、非理性」といった否定的意味をしか持たなかったことが、当時の辞書、例えばアカデミー第一版やフルチエールなどの辞書の定義から分かる³⁾。夢想に対する詩人たちの態度は両義的であるが⁴⁾、思想家たちは、夢想を否定的に捉えていることが幾つかの例によって分かる。例えば、モンテーニュは卑下するために自らの思索を夢想、つまり狂気の沙汰と語っている⁵⁾。デカルトは『情念論』において、夢想は機械論的に説明づけられるものとして低い評価をしか与えていない⁶⁾。さらにフォントネルは、『世界の複数性について』において、キリスト教的世界観にそぐわないような科学的世界観を提示する際、その世界観が夢想であるという口実を設けているが、このような事実も夢想が正常な思考形態と捉えられていなかったことを裏付けるものであろう⁷⁾。18世紀に至っても状況は同じであると言える。1762年版アカデミーの辞書は初版の定義を再録している⁸⁾。アベ＝プレヴォーやクレビヨンも夢想を積極的に自らの小説に取り入れているが⁹⁾、思想家たちは相変わらず夢想について否定的見解をしか提示していない。例えば、ドルバックは『キリスト教暴露』の中で、預言者たちの主張する奇蹟を妄想と捉えるが、そのような妄想を指すために「夢想」という語を用いている¹⁰⁾。コンディヤックは、真理の探究について論じるにあたり、夢想を理性的な精神指導の規則に従わないものとして断罪している¹¹⁾。デイドロは百科全書の「Rêver」という項目の中で、認識論のレベルでは夢想を自由な思考形態として肯定的に捉えているが、社交性の観点からは他人への配慮に欠ける行為として断罪している¹²⁾。このような状況にあって、ルソーが思想家として夢想を積極的に受け入れたことは注目に値する。従って、『新エロイズ』の分析に先立ち、ここでは、『孤独な散歩者の夢想』を再読し、人間論的観点から夢想に関するルソーの概念の特徴を再確認したい。

まず夢想へと導く内的条件と外的条件について確認するため、「第五の散歩」を再読したい。次の一節は、夢想における精神状態を語るものとしてしばしば引き合いにされるものである。

[...] s'il est un état où l'âme trouve une assiette assez solide pour s'y reposer tout entière et rassembler là tout son être, sans avoir besoin de rappeler le passé ni d'enjamber sur l'avenir ; où le temps ne soit rien pour elle, où le présent dure toujours sans néanmoins marquer sa durée et sans aucune trace de succession, sans aucun autre sentiment [...] que celui seul de notre existence, et que ce sentiment seul puisse la remplir tout entière ; tant que cet état dure celui qui s'y trouve peut s'appeler heureux, [...] d'un bonheur suffisant, parfait et plein, qui ne laisse dans l'âme aucun vide qu'elle sente le besoin de remplir. [...]

De quoi jouit-on dans une pareille situation ? De rien d'extérieur à soi, de rien sinon de soi-même et de sa propre existence, tant que cet état dure on se suffit à soi-même comme Dieu. Le sentiment de l'existence dépouillé de toute autre affection est par lui-même un sentiment précieux de contentement et de paix qui suffirait seul pour rendre cette existence chère et douce à qui saurait écarter de soi toutes les impressions sensuelles et terrestres qui viennent sans cesse nous en distraire et en troubler ici bas la douceur¹³⁾.

夢想を通して、ルソーは万物流転する現世から解放され、神と同じような恒常的な充足感を味わう。このような夢想の快樂は、「自己存在感 « le sentiment de l'existence »」に根ざすものであることがこの一節から分かる。ところで、このような自己存在感に起因する快樂を、デイドロもまた百科全書の項目 « D'élégant » において語っている。この項目の中で、デイドロは「甘美なる休息 « repos délicieux »」について、以下のように定義している。

Il ne lui restait dans ce moment d'enchantement et de faiblesse, ni mémoire du passé, ni désir de l'avenir, ni inquiétude sur le présent. Le temps avait cessé de couler pour lui, parce qu'il existait tout en lui-même ; le sentiment de son bonheur ne s'affaiblissait qu'avec celui de son existence. Il passait par un mouvement imperceptible de la veille au sommeil ; mais sur ce passage imperceptible, au milieu de la défaillance de toutes ses facultés, il veillait encore assez, sinon pour penser à quelque chose de distinct, du moins pour sentir toute la douceur de son existence : mais il en jouissait d'une jouissance tout à fait passive, sans y être attaché, sans y réfléchir, sans s'en réjouir, sans s'en féliciter ¹⁴⁾.

ここに提示される休息する若者の描写と、ルソーが享受する夢想の描写との間には、幾つかの類似点が見られる。その例として、自己存在感は時間意識が消失し、理性の働きが停止した状態の中で享受されるとされている点が挙げられる。また、甘美なる休息について定義する際、デイドロは自己存在感の享受に必要な条件として、敏感な器官、若さ、健康を挙げ、物理的感性の重要性を強調しているが、ルソーもまた、甘美な夢想へと誘うのは、外界から受ける心地よい物理的感覚であるとしている¹⁵⁾。

「第五の散歩」と百科全書の項目 « D'élégant » を比較検討する際、これまで強調されてきたのは、両テキストに見られる類似点である¹⁶⁾。しかし、ここで注目したいのは、類似点よりはむしろ快樂の源に対するルソーとデイドロの考え方の相違点である。既にみたとおり、デイドロは自己存在感の享受は全く受動的に、物理的感覚を通してなされるとする。一方、ルソーは、自己存在感が「あらゆる官能的な、地上的な印象を自分から遠ざけることが出来る人」のみ享受できるものであるとし、精神の積極的な働きを必要不可欠と考えている。このように精神の積極的な働きを重視するルソーのあり方は、「第五の散歩」の終末部において、夢想の快樂を享受できるのは想像力に恵まれた人の特権とされていることからより明確になる¹⁷⁾。

デイドロとルソーの考え方の相違がいかなる事情によるものかということは、後ほど提示するが、ここではまず、ルソーにおける夢想とは、外界から受ける物理的感覚を契機としつつ、想像力という精神の積極的な働きに支えられ外界と一体化することにより、自己存在感に根ざす快樂を享受する瞬間であることを確認しておきたい。

外界と精神の一体化から生まれる夢想の快樂の性質をより明確にするため、ここで「第七の散歩」における夢想についての記述に注目したい。

Non rien de personnel, rien qui tienne à l'intérêt de mon corps ne peut occuper vraiment mon âme.

Je ne médite, je ne rêve jamais plus délicieusement que quand je m'oublie moi-même. Je sens des extases, des ravissements inexprimables à me fondre pour ainsi dire dans le système des êtres, à m'identifier avec la nature entière. Tant que les hommes furent mes frères, je me faisais des projets de félicité terrestre ; ces projets étant toujours relatifs au tout, je ne pouvais être heureux que de la félicité publique, et jamais l'idée d'un bonheur particulier n'a touché mon cœur que quand j'ai vu mes frères ne chercher le leur que dans ma misère. Alors pour ne les pas haïr il a bien fallu les fuir ; alors me réfugiant chez la mère commune j'ai cherché dans ses bras à me soustraire aux atteintes de ses enfants, je suis devenu solitaire, ou, comme ils disent, insociable et misanthrope, parce que la plus sauvage solitude me paraît préférable à la société des méchants qui ne se nourrit que de trahisons et de haine¹⁸⁾.

この一節では、夢想についての思索に社会についての思索が伴っているが、ここで筆者は自らの夢想への好みのもつ二つの側面を浮き彫りにしようとして試みていると考えられる。第一に、ルソーは彼の政治思想（「全体に関する」「幸福の計画」）と「自然全体」との一体化への志向との連続性を強調し、社会に生きていたときも、孤独に生きる現在も、一貫して外界全体と調和しようと努める自己のあり方を強調しようとしている。そして第二に、「最も徹底した孤独な生活 « la plus sauvage solitude » と「悪人たちとの付き合い « la société des méchants »」を対置させ、公平な社会の外では、自分が一体化出来る外界は自然のみであることを明確化しようとしている。つまり、夢想の快楽は孤独な存在特有の快楽であり、ルソーはこの快楽を「自然全体」という外界の一部となることで享受するのである。このように夢想の快楽は「個人の幸福 « un bonheur particulier »」でありながら、全体との調和への志向に貫かれている。しかし、「私がこの上なく快い思いに耽り、夢想に耽るのは、私が私のことを忘れたときだけである」という一節は、夢想の快楽が完全な「自己意識」の消失によって享受されると示しているのではない。この一節は、引用文一行目を踏まえれば分かるとおり、夢想の快楽が、自己の精神が物質的要求から解放されることによって享受されることを示すと言える。このように、夢想の快楽が純然たる精神的快楽であることは、この引用文に先立つ一節において、物理的快楽よりも精神的快楽を優位とする自己の独自性をルソーが強調していることからより明確になるが、ここで、夢想は「純粹で無私無欲な観想」¹⁹⁾に源を発するとされていることに注目し、次の一節をもとにこのような観想の対象の性質を確認したい。

[...] vivifiée par la nature et revêtue de sa robe de noces au milieu du cours des eaux et du chant des oiseaux, la terre offre à l'homme dans l'harmonie des trois règnes un spectacle plein de vie, d'intérêt et de charme, le seul spectacle au monde dont ses yeux et son cœur ne se lassent jamais.

Plus un contemplateur a l'âme sensible plus il se livre aux extases qu'excite en lui cet accord. Une rêverie douce et profonde s'empare alors de ses sens, et il se perd avec une délicieuse ivresse dans l'immensité de ce beau système avec lequel il se sent identifié. Alors tous les objets particuliers lui échappent ; il ne voit et ne sent rien que dans le tout. Il faut que quelque circonstance particulière

resserre ses idées et circonscrite son imagination pour qu'il puisse observer par parties cet univers qu'il s'efforçait d'embrasser²⁰⁾.

「三つの界の調和 « l'harmonie des trois règnes »」「この調和 « cet accord »」「この美しい体系 « ce beau système »」などの言葉から、夢想の快楽は自然の物理的秩序を観想することによって引き起こるのが分かる。また自然の秩序の美が「目と心とが決して飽くことのない世界で唯一の光景」であるということから、自然の物理的秩序が、観想する者の物理的感覚だけでなく、その内面に訴えかけ、恒常的な快楽を与えると考えられる。つまり、夢想の快楽は自然の秩序を観想し、精神的次元でその自然の秩序と調和することによって得られる純然たる精神的快楽なのである。

このように『孤独な散歩者の夢想』では、夢想は自然の中で体験される。これに対し、『新エロイズ』では、夢想はサン＝ブルーにより社会の中で享受されるのは興味深い。以下、この社会の中での夢想の機能について考察を進めたい。

2. 夢想と変貌

『新エロイズ』後半では、サン＝ブルーがいかに過去の恋愛感情を昇華し、クラランの共同体の一員となるかということが、物語の筋のレベルで重要なテーマとなる。また、この恋愛感情の超克の過程は、ルソーが独自の道徳思想を意識的に提示している部分であり、従って、思想的にも重要な意味を持つ。第4部第11書簡に語られるエリゼの庭の散歩は、サン＝ブルーのクラランにおける生活のなかでも比較的初期に起こる出来事で、サン＝ブルーの恋愛感情の昇華の過程でも、殊の外重要なものの一つである。ジュリによって作られたエリゼの庭は、クラランの構造を模して作られている。この庭での散歩は、サン＝ブルーが共同体のシステムを垣間見、また、かつての恋人ジュリの記憶を捨て、現在のジュリの姿を受け入れる過程で重要な機能を果たしている。この庭の美について論じられる際、殊に関心が向けられたのは、鳥や植物、魚など庭の事物の叙述である。ここでは従来の考察とは視点を変え、散歩のエピソードの終末部に現れるサン＝ブルーの夢想に注目し、エリゼの美のサン＝ブルーの心理に与える影響を明らかにしたい。

ヴォルマール夫妻に導かれ、エリゼの庭を散歩し、その全貌が明らかにされた翌日、サン＝ブルーはただ一人で、かつての恋人ジュリの姿を思い浮かべるためにエリゼの庭へ散歩に出かける。

En entrant dans l'Élysée avec ces dispositions, je me suis subitement rappelé le dernier mot que me dit hier M. de Wolmar à peu près dans la même place. Le souvenir de ce seul mot a changé sur-le-champ tout l'état de mon âme. J'ai cru voir l'image de la vertu où je cherchais celle du plaisir. Cette image s'est confondue dans mon esprit avec les traits de Mme de Wolmar, et pour la première fois depuis mon retour j'ai vu Julie en son absence, non telle qu'elle fut pour moi et que j'aime encore à me

la représenter, mais telle qu'elle se montre à mes yeux tous les jours. Milord, j'ai cru voir cette femme si charmante, si chaste et si vertueuse, au milieu de ce même cortège qui l'entourait hier. Je voyais autour d'elle ses trois aimables enfants, honorable et précieux gage de l'union conjugale et de la tendre amitié, lui faire et recevoir d'elle mille touchantes caresses. Je voyais à ses côtés le grave Wolmar, cet Époux si chéri, si heureux, si digne de l'être. Je croyais voir son œil pénétrant et judicieux percer au fond de mon cœur et m'en faire rougir encore ; je croyais entendre sortir de sa bouche des reproches trop mérités, et des leçons trop mal écoutées. [...] Ah ! quel sentiment coupable eût pénétré jusqu'à elle à travers cette inviolable escorte ? Avec quelle indignation j'eusse étouffé les vils transports d'une passion criminelle et mal éteinte, et que je me serais mépris de souiller d'un seul soupir un aussi ravissant tableau d'innocence et d'honnêteté ! ²¹⁾

引用冒頭にあるサン＝ブルーが思い起こす言葉とは、「あなたのいる場所を尊重するようになりなさい。ここは美德の手によって設けられた場所なのです」²²⁾ というヴォルマルの言葉である。この言葉によって、サン＝ブルーの心の状態は突然変わってしまう。彼の心には、過去のジュリの姿、つまりクラランの外での記憶ではなく、現在のジュリの姿、つまりクラランの共同体の中での生活の記憶が甦るのである。ヴォルマルの目が自らの心の内奥を見抜き、そのことで「顔を赤らめさせるような気がした」という表現から、ヴォルマルの表象の認識は、サン＝ブルーが道徳的感情に目覚める契機となっているのが分かる。先の第一章では、「第七の散歩」の読解を通して、ルソーにおける夢の概念が、外界全体との調和への志向によって特徴づけられることを確認した。エリゼの庭での夢にもまた、このような外界との調和への志向が窺われる。しかし、ここでは調和すべき外界とは自然ではなく、徳高き人物が構成するクラランの共同体である。サン＝ブルーは、他者との関係を想像力によって捉え、「正しさと無垢の光景」と調和をなすべく内面の感情を秩序立てる。サン＝ブルーのこのような道徳的変貌こそ、共同体での夢を特徴づけるものと言える。

この一節に続く次の一節は、サン＝ブルーの精神と、その想像力の生み出す表象との一体化を示すものだが、この一体化は、秩序なす光景に見合ったサン＝ブルーの変貌を示すものであろう。

Je repassais dans ma mémoire les discours qu'elle [=Julie] m'avait tenus en sortant ; puis remontant avec elle dans un avenir qu'elle contemple avec tant de charmes, je voyais cette tendre mère essuyer la sueur du front de ses enfants, baiser leurs joues enflammées, et livrer ce cœur fait pour aimer au plus doux sentiment de la nature ²³⁾.

ここで「未来の中に遡り」という一見唐突に見える表現は、子供が成長し庭の手入れをする有様を夢見る前日のジュリの言葉を思い起こしていることを示す。前日の記憶から出発し、サン＝ブルーは、その精神を未来へと開いていく。ここから、想像の逸脱を矯正し共同体の成員と結ば

れるサン＝ブルーの精神が恒常性に至ることが見て取られる。このように、エリゼの庭の散歩においても、夢は、外界との一体化によって、精神が恒常的な充足感を得る状態であることが分かるが、そのような恒常性に至るには、まさにその夢の中で、道徳的変貌を遂げることを前提としていると言える。

ここで、サン＝ブルーが道徳的感情に目覚める契機となっているヴォルマルの表象の叙述を、ジュリの回心の場面の一節と比較検討したい。

Je voyais à ses côtés le grave Wolmar, cet Époux si chéri, si heureux, si digne de l'être. Je croyais voir son œil pénétrant et judicieux percer au fond de mon cœur et m'en faire rougir encore ; je croyais entendre sortir de sa bouche des reproches trop mérités, et des leçons trop mal écoutées ²⁴⁾.

Je [=Julie] crus voir l'organe de la providence et entendre la voix de Dieu dans le ministre prononçant gravement la sainte liturgie. La pureté, la dignité, la sainteté du mariage, si vivement exposées dans les paroles de l'Écriture, ses chastes et sublimes devoirs si importants au bonheur, à l'ordre, à la paix, à la durée du genre humain, si doux à remplir pour eux-mêmes ; tout cela me fit une telle impression que je crus sentir intérieurement une révolution subite. Une puissance inconnue sembla corriger tout à coup le désordre de mes affections et les rétablir selon la loi du devoir et de la nature. L'œil éternel qui voit tout, disais-je en moi-même, lit maintenant au fond de mon cœur ; il compare ma volonté cachée à la réponse de ma bouche [...] ²⁵⁾.

2 番目の引用は、ジュリが結婚の日、教会に足を踏み入れた時に体験する啓示の瞬間を描いたものである。この啓示を通してジュリは道徳的変貌を遂げ、自己愛、徳への愛、そして神の定める自然の秩序への愛を回復する。ここで注目したいのは、2 番目の引用 « L'œil éternel qui voit tout [...] lit maintenant au fond de mon cœur » という神を描写する表現と、1 番目の引用 « Je croyais voir son œil pénétrant et judicieux percer au fond de mon cœur » というヴォルマルを描写する表現の類似である。このような描写の類似から、ジュリが啓示を通して神を源とする自然の道徳的秩序への志向としての「秩序への愛」に目覚めるのと同様、サン＝ブルーもまた、夢を通してヴォルマルを源とする共同体の道徳的秩序への志向としての「秩序への愛」に目覚めると分かる。

ここで、サン＝ブルーの道徳的変貌が、彼の自我と如何に融和されうるかという問題を検討するため、エリゼでの夢について振り返るサン＝ブルー自身の言葉に注目したい。

Je m'étais promis une rêverie agréable ; j'ai rêvé plus agréablement que je ne m'y étais attendu. J'ai passé dans l'Élysée deux heures auxquelles je ne préfère aucun temps de ma vie. En voyant avec quel charme et quelle rapidité elles s'étaient écoulées, j'ai trouvé qu'il y a dans la méditation des pensées honnêtes une sorte de bien-être que les méchants n'ont jamais connu ; c'est celui de se plaire avec soi-même. Si l'on y songeait sans prévention, je ne sais quel autre plaisir on pourrait égaler à celui-là. Je

sens au moins que quiconque aime autant que moi la solitude doit craindre de s'y préparer des tourments. Peut-être tirerait-on des mêmes principes la clé des faux jugements des hommes sur les avantages du vice et sur ceux de la vertu : Car la jouissance de la vertu est toute intérieure et ne s'aperçoit que par celui qui la sent : mais tous les avantages du vice frappent les yeux d'autrui, et il n'y a que celui qui les a qui sache ce qu'ils lui coûtent ²⁶⁾.

「正しい心の省察の中に、悪人が決して知ることのなかった一種の幸福を見出した。それは自己と共にいることを楽しむとすることである」という一節には、デイドロの「一人でいるのは悪人だけ」²⁷⁾という一節に対するルソーの強い意識が見て取られる。しかし、それは純然たる「自己愛」の賞賛の一節と結論づけることは出来ないと考えられる。「正しい考えの省察」を以て初めて「自己と楽しむ」ことが出来るということから、夢を通して目覚める「秩序への愛」という道徳的感情が「自己愛」と相容れぬものではなく、相補いあうものであることが窺われる。引用後半の徳と悪徳の二項対立からは、道徳性が物理的感覚ではなく、内面の感情、つまり精神的感受性に由来することが浮き彫りにされる。引用冒頭でサン＝ブルー自身、「期待していたよりも心地よい」夢想だったと納得しているが、彼が享受するこのような精神的快楽は、彼が夢を通しての内的変貌を自らにより益になるものとして内発的に受け入れる要因となっていると考えられる。つまり、夢の与える精神的快楽が、また夢を通しての内的変貌を支えているのである。

エリゼでの夢の道徳的機能を浮き彫りにするため、ここで、この庭での夢と、第4部第17書簡に語られる湖上での夢の精神に与える影響を比較検討してみたい。

ヴォルマールの不在時に、ジュリとサン＝ブルーは、船遊びをしに湖へ出かけるが、突然の嵐でメーユリ、つまり、かつてサン＝ブルーが恋人ジュリの姿を思い浮かべて過ごした地へと漂着する。このエピソードは、エリゼの庭のエピソード同様、人間の精神に対する環境の影響力という『新エロイズ』における重要な問題系に属するものである。次の一節は、サン＝ブルーがそのような思い出の場所に到達した時の印象を語っているところである。

[...] je la [=Julie] conduisis vers le rocher et lui montrai son chiffre gravé dans mille endroits, et plusieurs vers du Pétrarque et du Tasse relatifs à la situation où j'étais en les traçant. En les revoyant moi-même après si longtemps, j'éprouvai combien la présence des objets peut ranimer puissamment les sentiments violents dont on fut agité près d'eux ²⁸⁾.

エリゼの庭に足を踏み入れたとき、前日のヴォルマールの言葉が突然サン＝ブルーの心に甦るように、岩に刻まれたタッソーやペトラルカの詩句を目にするサン＝ブルーの心には、過去の恋愛の思い出が甦る。ジルソンが指摘するように、この一節からは、確かに外界から受ける物理的感覚の精神に与える影響が確認されるように思われる²⁹⁾。しかし、そのような印象は持続的ではないことが、引き続き湖上での夢の一節から明らかになる。

Le bruit égal et mesuré des rames m'excitait à rêver. Le chant assez gai des bécassines, me retraçant les plaisirs d'un autre âge, au lieu de m'égayer m'attristait. Peu à peu je sentis augmenter la mélancolie dont j'étais accablé. Un ciel serein, les doux rayons de la lune, le frémissement argenté dont l'eau brillait autour de nous, le concours des plus agréables sensations, la présence même de cet objet chéri, rien ne put détourner de mon cœur mille réflexions douloureuses.

Je commençai par me rappeler une promenade semblable faite autrefois avec elle [=Julie] durant le charme de nos premières amours. Tous les sentiments délicieux qui remplissaient alors mon âme s'y retracèrent pour l'affliger ; tous les événements de notre jeunesse, nos études, nos entretiens, nos lettres, nos rendez-vous, nos plaisirs, [...] ces foules de petits objets qui m'offraient l'image de mon bonheur passé, tout revenait, pour augmenter ma misère présente, prendre place en mon souvenir ³⁰⁾.

この夢とエリゼでの夢を比較すると、エリゼの環境と、メーユリの環境の精神に与える影響の相違が明らかになる。ここでも、「第五の散歩」の夢と同じように、オールや水の単調でリズムカルな音が夢の契機となっており、また、エリゼの庭でと同様、サン＝ブルーは「この上なく心地よい感覚」を感じ取っている。しかし、エリゼの庭での夢ではサン＝ブルーは時間意識から解放され、恒常的な精神的快楽を享受するのに対し、この湖上の夢においては、心地よい感覚を外界から享受しつつ、その内面ではサン＝ブルーは過去と現在の相違を痛感し、強い苦痛にさいなまれる。この湖上の夢は、徳の勝利に源を発する甘美な感情によって超克されるが³¹⁾、エリゼの夢と湖上の夢がそれぞれサン＝ブルーの精神に与える影響の相違からは、夢の快楽の享受が、外界から受ける物理的感覚によるのではなく、精神の積極的な働きを前提としていることが分かる。つまり、サン＝ブルーは恒常的快楽を享受するために、積極的に自分が受け入れるべき外界からの印象を選択していると考えられるのである。

サン＝ブルーが志向する印象を明確にするために、ここでエリゼの美の性質について検討したい。夢は、サン＝ブルーの「彼女が名付けた隠れ家と同様、彼女の心の奥底にも平安が支配しているのだ」³²⁾という言葉で締めくくられる。サン＝ブルーは、夢を通して、エリゼの庭がその創造者であるジュリの道徳性を模倣していること、換言すれば、ヴォルマールの言葉の正しさを納得する。この夢は、同時に、ジュリの次のような言葉を納得する瞬間でもある。

Il est vrai [...] que la nature a tout fait, mais sous ma direction [de Julie], et il n'y a rien là que je n'aie ordonné ³³⁾.

エリゼの美をありのままの自然の美と誤解するサン＝ブルーに対するジュリのこの言葉を踏まえると、夢を通してサン＝ブルーが志向する美とは、ジュリの道徳性によって秩序づけられた美であることが分かる。エリゼの道徳的秩序の美は、サン＝ブルーの精神の中で、共同体の秩序の源としてのヴォルマールのイメージと重なり合う。このような二重の秩序のイメージに従うべく、サン＝ブルーは、夢を通して道徳的存在となるのである。ジルソンやモリセは、ルソ

ーにおける感受性の強い人間とは受動的に外界の与える物理的印象から影響を受ける人間である
と考える³⁴⁾。しかし、エリゼの庭に於ける夢想についての考察から、夢想の快樂が物理的
感受性ではなく、道徳的秩序の美と調和しようとする精神の積極的な働きによって成り立つ
ことが明らかになる。エリゼの夢想を通してサン＝ブルーは徳を獲得する。徳という語の語
源的意味は力であるが、ここでサン＝ブルーが獲得する徳は、秩序への愛によって特徴づけ
られる精神の力を指すものであろう。

ここでは、サン＝ブルーの恋愛感情の超克における夢想の機能に注目し、クラランの
共同体の構造でも、殊にエリゼの庭に注目して考察してきた。第三章では、これまでの夢
想の道徳的機能についての考察を踏まえつつ、視野を広げクラランの共同体の中での夢
想の機能を考察することで、ルソーの人間論における夢想の機能について明らかにしたい。

3. クラランの共同体における夢想

ここではまず、子供の教育に関する第5部第3書簡について考察したい。この書簡は論争
的性が強く、ここでルソーは、サン＝ブルーにエルヴェシウス流の唯物論的
道徳教育の立場を支持させ、それがルソーの教育観を反映するヴォル
マルの教育観によって否定される過程を描くことにより、当時の唯物論
に反論している。この教育に関する哲学談義に先立つイギリス風の朝
« la matinée à l'anglaise »と称される場面での夢想について、ここでは検討したい。

イギリス風の朝のエピソードでも次の一節は、殊の外、研究者の関心を惹いてきたものである。
フランスの民衆が病臥に伏す王を案ずる様子を新聞で知り、皆に愛される王をうらやむ
ジュリに、ヴォルマルは次のように語りかける。

N'enviez rien, lui [=à Julie] a dit son mari d'un ton qu'il m'eût dû laisser prendre ; il y a longtemps que nous sommes tous vos sujets. À ce mot, son ouvrage [de Julie] est tombé de ses mains ; elle a tourné la tête, et jeté sur son digne époux un regard si touchant, si tendre, que j'en ai tressailli moi-même. Elle n'a rien dit : qu'eût-elle dit qui valût ce regard ? Nos yeux se sont aussi rencontrés. J'ai senti à la manière dont son mari m'a serré la main que la même émotion nous gagnait tous trois, et que la douce influence de cette âme expansive agissait autour d'elle, et triomphait de l'insensibilité même³⁵⁾.

このように「ずっと前から私たちは皆あなたの臣下です」というヴォルマルの言葉に感動する
ジュリのまなざしが、ヴォルマルとサン＝ブルーに逆に感動を与える。3人の味わう恍惚感
は、皆が、ジュリの感受性豊かな精神の影響を受けているというヴォルマルの言葉の正しさの
証左となっている。多くの研究者はこの場面をサン＝ブルー、ジュリ、ヴォルマルが友愛の情
念で結ばれ、三人の精神が沈黙の中で通い合う喜びを享受する特権的な場と捉え、またその恍惚
感『孤独な散歩者の夢想』に見られる恍惚感に近いものであると強調してきた³⁶⁾。そして引

き続く哲学談義とこのエピソードの間には、断絶があると考えてきた。しかし、引き続き夢想についての一節に注目することで、このイギリス風の朝のエピソードと子供の教育についての議論との間の連続性が明らかになるだろう。

C'est dans ces dispositions qu'a commencé le silence dont je vous [=à Milord Édouard] parlais ; vous pouvez juger qu'il n'était pas de froideur et d'ennui. Il n'était interrompu que par le petit manège des enfants ; encore, aussitôt que nous avons cessé de parler, ont-ils modéré par imitation leur caquet, comme craignant de troubler le recueillement universel. C'est la petite Surintendante qui la première s'est mise à baisser la voix, à faire signe aux autres, à courir sur la pointe du pied, et leurs jeux sont devenus d'autant plus amusants que cette légère contrainte y ajoutait un nouvel intérêt. Ce spectacle qui semblait être mis sous nos yeux pour prolonger notre attendrissement a produit son effet naturel. [...] Que de choses se sont dites sans ouvrir la bouche ! Que d'ardents sentiments se sont communiqués sans la froide entremise de la parole ! Insensiblement Julie s'est laissée absorber à celui qui dominait tous les autres. Ses yeux se sont tout à fait fixés sur ses trois enfants, et son cœur ravi dans une si délicieuse extase animait son charmant visage de tout ce que la tendresse maternelle eut jamais de plus touchant.

Livrés nous-mêmes à cette double contemplation, nous nous laissions entraîner Wolmar et moi à nos rêveries, quand les enfants, qui les causaient, les ont fait finir³⁷⁾.

先に見たように、登場人物が味わう恍惚感はジュリの感受性豊かな「広がりゆく精神」に源を発するものである。しかしその恍惚感の源はジュリから子供たちへと横滑りしていくことは、周囲の雰囲気を感じ、自発的におとなしくなる子供たちの光景が、サン＝ブルーとヴォルマル夫妻の眼前に「その感動を長引かせるために置かれたように見えた」という表現、子供たちの様子とジュリの母性愛に満ちた様子という「二重の観想」という表現などから分かる。さらに、最終的には「夢を引き起こした」のは「子供たち」であるとされていることにも注目したい。このような甘美な夢が、子供たちの繰り広げる光景への感動によって起こることは、子供の教育というこの書簡のテーマと密接なつながりを持つと考えられる。事実、この引用文で確認される光景は、引き続き哲学談義の中で提示されるヴォルマルの教育原理の精髓を示すと考えられる。

子供の教育に関する議論は、より具体的には、社会生活に相応しい精神を形成する方法をめぐって展開される。サン＝ブルーはここで、エルヴェシウスに倣い、教育によって人間の本性を矯正することがその個人のためにも社会のためにも有益であると主張する³⁸⁾。それに対し、ここでルソーの思想を代弁するヴォルマルは、人間の自然、すなわち人間の本性に従った教育の重要性を強調する。次に挙げるのは、そのようなヴォルマルの教育方針の正当性をサン＝ブルーに説得しようとするジュリの言葉である。

[...] convaincue de la bonté de sa méthode [de M. de Wolmar], je tâche d'y conformer en tout ma

conduite dans le gouvernement de la famille. Ma première espérance est que des méchants ne seront pas sortis de mon sein ; la seconde est d'élever assez bien les enfants que Dieu m'a donnés, sous la direction de leur père, pour qu'ils aient un jour le bonheur de lui ressembler. J'ai tâché pour cela de m'approprier les règles qu'il m'a prescrites, en leur donnant un principe moins philosophique et plus convenable à l'amour maternel ; c'est de voir mes enfants heureux³⁹⁾.

「子供たちが幸せなのを見る」、つまり本性の自然な動きに子供を委ねるというジュリの教育方針は、イギリス風の朝の場面において、子供を束縛することなく静かに見守るジュリの姿に重なる。また周囲の大人への気遣いから自発的におとなしくなる子供たちの様子は、ヴォルマールが子供たちに課する唯一の法、すなわち、「自由の法、同席する人が子供たちをじゃましないように子供たちも同席するものを邪魔しないという法」⁴⁰⁾の有効性を証明するものであると考えられる。このようにヴォルマールの教育システムを体現したジュリと子供たちの光景の美を前に引き起こるサン＝プルーの夢想は、ヴォルマールの教育原理の正当性をサン＝プルー自身が感じ取る場面であると考えられ、従って、イギリス風の朝のエピソードと哲学談義は互いに補い合うものであることが分かる。エリゼでの夢想と同様、イギリス風の朝の夢想もまた、サン＝プルーの内的変貌の契機となっているが、これは、サン＝プルーがクラランの共同体でヴォルマールの教育方針に従いながら家庭教師としての役目を果たす上で重要な道徳教育の一環と見なすことが出来る。ここから、夢想はただサン＝プルーが恋愛感情を超克する際のみならず、人間としての義務を認識する際にも重要な機能を果たすことが明らかになる。

このように、イギリス風の朝のエピソードを考察することによって、夢想に付与される道徳的感化の機能は、モリセが考えるように小説の筋に限ったものではなく⁴¹⁾、クラランの共同体についての書簡が提示するルソーの人間論と密接な関わりを持つことが浮き彫りにされてくる。そこで、次にヴォルマールによる共同体の管理方針に対するサン＝プルーの心理を検討することにより、クラランの共同体における夢想の道徳的機能について明らかにしたい。

まず、ブドウの収穫に関する第5部第7書簡冒頭に語られる、労働の光景を前にしたサン＝プルーの心理に注目したい。

[...] quel charme de voir de bons et sages régisseurs faire de la culture de leurs terres l'instrument de leurs bienfaits, leurs amusements, leurs plaisirs, verser à pleines mains les dons de la providence ; engraisser tout ce qui les entoure, hommes et bestiaux, des biens dont regorgent leurs granges, leurs caves, leurs greniers ; accumuler l'abondance et la joie autour d'eux, et faire du travail qui les enrichit une fête continuelle ! Comment se dérober à la douce illusion que ces objets font naître ? On oublie son siècle et ses contemporains ; on se transporte au temps des patriarches ; on veut mettre soi-même la main à l'œuvre, partager les travaux rustiques, et le bonheur qu'on y voit attaché. Ô temps de l'amour et de l'innocence, où les femmes étaient tendres et modestes, où les hommes étaient simples et vivaient contents ! Ô Rachel ! fille charmante et si constamment aimée, heureux celui qui pour

t'obtenir ne regretta pas quatorze ans d'esclavage ! Ô douce élève de Noémi, heureux le bon vieillard dont tu réchauffais les pieds et le cœur ! Non, jamais la beauté ne règne avec plus d'empire qu'au milieu des soins champêtres. C'est là que les grâces sont sur leur trône, que la simplicité les pare, que la gaieté les anime, et qu'il faut les adorer malgré soi. Pardon, Milord, je reviens à nous ⁴²⁾.

労働の光景を前に、サン＝ブルーは聖書のルツ記や創世記に語られる族長自体を思い起こす⁴³⁾。殊に、「我が世を忘れ、同時代の人間どもを忘れ、身は族長時代にあるような気がし、自ら仕事に手を着けたくなり、田舎の労働とそれに結びついていると分かる幸福とに与りたくなる」という部分から、サン＝ブルーは、視覚で捉えられる現実界と想像界が渾然一体となった世界へと没入していくことが確認される。また、目の前の光景が、恒常的幸福の象徴である族長時代との連続性を感じさせることから、クラランの労働の光景がもたらす快樂が普遍的なものであることが分かる。つまり、サン＝ブルーはここで精神が外界と一体化し、恒常的快樂を享受しているのであるが、「甘美な幻想」と形容されるこのような心理状態は、これまで確認してきた夢想の特徴と重なるものであろう。ところで、このような快樂の享受は、サン＝ブルーの道徳的変貌を前提としていることが、この一節に先立つ段落から明らかになる。

L'imagination ne reste point froide à l'aspect du labourage et des moissons. La simplicité de la vie pastorale et champêtre a toujours quelque chose qui touche. Qu'on regarde les prés couverts de gens qui fanent et chantent, et des troupeaux épars dans l'éloignement : insensiblement on se sent attendrir sans savoir pourquoi. Ainsi quelquefois encore la voix de la nature amollit nos cœurs farouches, et quoiqu'on l'entende avec un regret inutile, elle est si douce qu'on ne l'entend jamais sans plaisir ⁴⁴⁾.

サン＝ブルーの感動は単なる叙情性の表れではなく、道徳的性格を備えるものであることが「自然の声」によって我々の荒々しい心が和らげられるという一節から分かる。ここで「自然の声」という表現は二重の意味を持つと考えられる。まず第一に、この表現はサン＝ブルーの想像力に訴えかける外界の光景を指し、第二に「自然の声」は、人間の精神の内奥に存在し、共同体の光景を眺めることで呼び覚まされる道徳的感情、人間の本性の声を指すと考えられる。従って、外界の秩序が人間の心に訴える力とそれに呼応する人間の道徳的感情とを共に示す「自然の声」という表現は、共同体の光景とサン＝ブルーの内面との調和を示すものといえよう。

このようにクラランの共同体での様々な場面が、サン＝ブルーを夢想へと誘い、道徳的感情に目覚めさせる。ここで夢想を通してサン＝ブルーに道徳的感化を与えるこの共同体を支える根本原理を検討することで、夢想と社交性の関連を明らかにしてみたい。

Au contraire, un ordre de choses où rien n'est donné à l'opinion, où tout a son utilité réelle et qui se borne aux vrais besoins de la nature n'offre pas seulement un spectacle approuvé par la raison, mais qui contente les yeux et le cœur, en ce que l'homme ne s'y voit que sous des rapports agréables, comme

se suffisant à lui-même, que l'image de sa faiblesse n'y paraît point, et que ce riant tableau n'excite jamais de réflexions attristantes. Je défie aucun homme sensé de contempler une heure durant le palais d'un prince et le faste qu'on y voit briller sans tomber dans la mélancolie et déplorer le sort de l'humanité. Mais l'aspect de cette maison et de la vie uniforme et simple de ses habitants répand dans l'âme des spectateurs un charme secret qui ne fait qu'augmenter sans cesse. Un petit nombre de gens doux et paisibles, unis par des besoins mutuels et par une réciproque bienveillance y concourt par divers soins à une fin commune : chacun trouvant dans son état tout ce qu'il faut pour en être content et ne point désirer d'en sortir, on s'y attache comme y devant rester toute la vie, et la seule ambition qu'on garde et celle d'en bien remplir les devoirs⁴⁵⁾.

引用冒頭の「自然の真の要求に止まっている事物の秩序」という表現から、クラランの物理的秩序はまず、自然の物理的秩序と合致することが分かり、先ほどクラランの労働の光景が「自然の声」と形容されていた理由が明らかにされる。さらに、「目と心とを満足させる」という表現、「見る人の心に密やかな魅惑を与える」という表現からは、クラランの秩序は心情に訴えかけるものであることが窺われる。従って、クラランの物理的秩序の美に関する一節と思われるこの引用文はまた、クラランの道徳的秩序に関するものであり、この共同体の秩序は道徳的次元でも自然の秩序に従うことを示している。殊に引用後半からは、クラランの道徳的秩序が人間の精神に与える影響が見て取られ、ここから、クラランの秩序の美は、人々に恒常的な精神的充足感を与えることによって、その道徳的秩序に内発的に従い、義務を果たす意志を抱かせると分かる。ここで、サン＝ブルーが恒常的な精神的快楽を享受すべく、夢想を通して内発的に道徳的感情に目覚めていたことを思い起こすと、夢想を通してのサン＝ブルーの内的変貌は、上に挙げた一節から確認されるクラランの道徳律と密接な関係にあると考えることが出来る。

ルソーにおける夢想は、これまで孤独を愛する作家の性格と関連づけられるとされてきた。しかし、ここまで行ってきたサン＝ブルーの夢想に関する考察から、夢想に対するルソーの概念が、人間の社交性という当時議論盛んであった問題に対する彼の見解と密接な関係にあると確認される。そこで最後に、ルソーの道徳思想における夢想の位置づけを試みたい。

ヴォルマールのうち立てるクラランの秩序は、「世界の統治においてうち立てられる秩序」、つまり神を源とする自然の秩序を模したものであることが、結婚の直後、サン＝ブルーに宛てたジュリの手紙においても強調されている⁴⁶⁾。ここで、「善は美が実践に移されたものであり、一方は他方に密接に関わり、美も善も秩序だった自然の中では源を同じくしている」⁴⁷⁾という『新エロイズ』第1部におけるサン＝ブルー自身の言葉を踏まえると、自然の秩序を模するからこそ、クラランの共同体は道徳的感化を与えることの出来るような美を体現すると考えられる。このように道徳的感情の覚醒に有利な環境でのサン＝ブルーの内的変貌は、これまで『新エロイズ』の主な道徳教育の方法とされてきた「ヴォルマールの方法」に一見似通っているように思われる。しかし、「ヴォルマールの方法」が、物理的な環境の影響力を重視するものであり、「本質的に受動的な存在」に適応されるのに対し⁴⁸⁾、夢想を通しての啓蒙は、物理的感覚よりむしろ精神の積

極的な働きを前提としている。その点において、「ヴォルマールの方法」よりも、むしろ夢想に付与される道徳的感化の機能こそ、ルソーの道徳思想の根本原理、つまり、道徳的感受性に関する議論と結びつけられると言える。

[...] quand, délivrés des illusions que nous font le corps et les sens, nous jouirons de la contemplation de l'Être suprême et des vérités éternelles dont il est la source, quand la beauté de l'ordre frappera toutes les puissances de notre âme, et que nous serons uniquement occupés à comparer ce que nous avons fait avec ce que nous avons dû faire, c'est alors que la voix de la conscience reprendra sa force et son empire [...] ⁴⁹⁾.

[...] sans doute l'homme vertueux sera plus qu'eux [=les Anges]. Unie à un corps mortel par des liens non moins puissants qu'incompréhensibles, le soin de la conservation de ce corps excite l'âme à rapporter tout à lui, et lui donne un intérêt contraire à l'ordre général qu'elle est pourtant capable de voir et d'aimer ; c'est alors que le bon usage de sa liberté devient à la fois le mérite et la récompense, et qu'elle se prépare un bonheur inaltérable en combattant ses passions terrestres et se maintenant dans sa première volonté ⁵⁰⁾.

道徳性に関するこの議論は精神と肉体の二項対立を軸として展開される。肉体の呪縛から精神が解放され、神を源とする万物の秩序の美を観想し、秩序への愛、つまり道徳的感受性に目覚めることが人間の尊厳に関わるとされている。このように、道徳性が人間の精神性に根ざすとルソーが執拗に強調するのは、道徳的感受性に関する議論がデイドロを始めとする百科全書派の唯物論的道徳観に対する反論だからである。サン＝ブルーの夢想の考察から、夢想についての記述は、これまで考えられてきたように社会と孤独の対立に立脚するのではなく、物理的感受性と精神的感受性の対立に立脚するものなのであると分かる。つまり、『新エロイズ』における夢想は人間の道徳的能力に関する論争的文脈の中に位置づけることができるのである。さらに、道徳的感受性に立脚する夢想を一個人の道徳的変貌の契機として提示することで、ルソーは彼の理論を実践に移したのみならず、個人の精神的自由と人間としての義務を融和させ、社会と個人の対立に起因する困難な問題を解決しようと試みたと考えられる。このように、ルソーは思想的小説の中で、理論的著作とは性格の異なる啓蒙の手段の可能性を示唆しているのである。

以上、サン＝ブルーが道徳的感情に目覚める契機となる夢想の考察を通して、『新エロイズ』における夢想が、道徳性に関する百科全書派の唯物論的道徳観への反論をなすルソー独自の道徳観と関連づけられることを示した。また、このように道徳的感受性に関する議論を踏まえることで、ルソーの自伝における夢想についても新たな解釈が出来る。第一章で「第七の散歩」から、夢想は、精神的次元における「自然の秩序の美」との調和に対するルソーの志向を示すことを確認した。このような夢想は自然の道徳的秩序に一貫して従う作家のあり方を示し、『エミール』に展開される道徳的感受性に関する議論と関連づけられると考えられる。また、同じく第一章で、

快楽に対するデイドロとルソーの考え方を比較した際、デイドロが物理的感覚に由来する快楽を追求していたのに対し、ルソーが夢想を通して自然の秩序に調和することにより精神的快楽を追求する自己の独自性を強調しているのを確認した。このような事情も、夢想の概念が、道徳性に関する論争の延長上にあることを踏まえるとよりよく理解される⁵¹⁾。ルソーが普遍的道徳体系に内発的に従うことを示す夢想に関する言説はまた、不当に迫害された自己の弁護というルソーの自伝の機能とも合致する。百科全書派との論争を通してうち立てられた道徳思想に頼りながら、ルソーは自らの夢想への好みを強調しつつ、自己の不屈の道徳的感情を証明しようとしているのである。このように、夢想についての言説は、多分に論争的性格を備えたものであり、孤独を愛する作家の姿よりは、むしろ社会を常に意識する思想家の姿を垣間見させるものなのである。

註

- 1) *Julie ou La Nouvelle Héloïse* (以下 *La Nouvelle Héloïse* と略す), n. 2 de la p. 77, *Œuvres complètes*, Gallimard, « la Bibliothèque de la Pléiade », t. II, p. 1390 (par Bernard Guyon). ルソーの作品の引用はこの版により、以下、「O. C.」と略し、巻号はローマ数字で示す。綴りは現代綴りとするが、句読点、大文字は原典に従う。
- 2) Robert Morrissey, « Rousseau : D'un topos littéraire à un mythe personnel », dans *La Rêverie jusqu'à Rousseau. Recherches sur un topos littéraire*, French Forum, 1984, pp. 124-159.
- 3) Article « Rêverie », dans *Dictionnaire universel* d'Antoine Furetière, 1690, réimp., SNL Le Robert, t. III, 1978 ; Article « Rêverie », dans *Dictionnaire* de l'Académie française, 1694, réimp., France Tosho Reprints, t. II, 1967, p. 403.
- 4) Ronsard, *Le Premier Livre des Amours*, « Sonnet CXLIV », dans *Œuvres complètes*, édition de J. Céard-D. Ménager-M. Simonin, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1993, p. 98 ; Saint-Amant, *Les Œuvres*, « La Solitude à Alcidon », v. 24, dans *Œuvres*, édition de Jacques Bailbé, STFM, t. I, 1971, p. 35.
- 5) Montaigne, *Les Essais*, livre II, chap. VIII, édition de Pierre Villey, Presses universitaires de France, 1992, p. 385.
- 6) Descartes, *Les Passions de l'âme*, Ière Partie, art. 21, dans *Œuvres philosophiques*, édition de Ferdinand Alquié, « Classiques Garnier », t. III, 1989, pp. 968-969.
- 7) Fontenelle, *Entretiens sur la pluralité des mondes habités*, dans *Œuvres complètes*, Fayard, t. II, 1991, pp. 17-19.
- 8) *Dictionnaire* de l'Académie française, 1762, dans *L'Atelier historique de la langue française* (CD-ROM), Redon.
- 9) Prévost, Histoire de M. Cleveland, fils naturel de Cromwell, écrite par lui-même, et traduite de l'anglais par l'auteur de Mémoires d'un homme de qualité, livre VI, dans *Œuvres*, Slatkine Reprints, t. V, 1969, p. 516, 558, 563 ; Crébillon, Les Égarements du cœur et de l'esprit, Ière Partie, dans *Œuvres complètes*, édition de Jean Sgard, « Classiques Garnier », t. II, 2000, p. 107, 109, 126, 129 ; id., Le Sopha, conte moral, Ière Partie, chap. II, dans *ibid.*, p. 296, Ière Partie, chap. VII, dans *ibid.*, pp. 326-327.
- 10) D'Holbach, *Le Christianisme dévoilé*, chap. VI, dans *Œuvres philosophiques*, Éditions Alive, t. I, 1998, p. 36, pp. 43-44.

- 11) Condillac, *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, IIe Partie, IIe section, chap. IV, Éditions Alive, 1998, pp. 301-302.
- 12) Article « Rêver », dans *Encyclopédie*, t. XIV, 1765, p. 228. デイドロにおける夢想については以下の論文を参照した。井田尚「デイドロにおける夢想, 対話, 演劇 - 『ラモアの甥』 『俳優に関する逆説』 『ダランベールの夢』 をめぐって - 」, 『仏語仏文学研究』, 東京大学仏語仏文学研究会, 第13号, 1995, pp. 47-67.
- 13) *Les Rêveries du promeneur solitaire* (以下 *Les Rêveries* と略す), « Cinquième Promenade », O.C. I, pp. 1046-1047.
- 14) Article « Dèlicieux », dans *Encyclopédie*, t. IV, 1754, p. 784.
- 15) *Les Rêveries*, « Cinquième Promenade », O.C. I, p. 1045.
- 16) Roland Mortier, « À propos du sentiment de l'existence chez Diderot et Rousseau », dans *Diderot Studies*, n° 6, 1964, pp. 183-195.
- 17) *Les Rêveries*, O.C. I, pp. 1047-1048.
- 18) *Les Rêveries*, « Septième Promenade », O.C. I, pp. 1065-1066.
- 19) *Ibid.*, O.C. I, p. 1065.
- 20) *Ibid.*, O.C. I, pp. 1062-1063.
- 21) *La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XI, O.C. II, pp. 486-487.
- 22) *Ibid.*, O.C. II, p. 485.
- 23) *Ibid.*, O.C. II, p. 487.
- 24) *Ibid.*, O.C. II, pp. 486-487.
- 25) *La Nouvelle Héloïse*, Troisième Partie, lettre XVIII, O.C. II, p. 354.
- 26) *La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XI, O.C. II, pp. 487-488.
- 27) Diderot, *Le Fils naturel*, dans *Ceuvres complètes*, édition de H. Dieckmann-J. Varloot-J. Proust, Hermann, t. X, 1980, p. 62.
- 28) *La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XVII, O.C. II, p. 519.
- 29) Étienne Gilson, « La méthode de M. de Wolmar », dans *Les Idées et les lettres*, 2e éd, J. Vrin, 1955, pp. 297-298.
- 30) *La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XVII, O.C. II, p. 520.
- 31) *Ibid.*, O.C. II, p. 521.
- 32) *La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XI, O.C. II, p. 487.
- 33) *Ibid.*, O.C. II, p. 472.
- 34) É. Gilson, *op. cit.*, p. 280 ; R. Morrissey, *op. cit.*, p. 140.
- 35) *La Nouvelle Héloïse*, Cinquième Partie, lettre III, O.C. II, p. 559.
- 36) Jean Starobinski, *Jean-Jacques Rousseau. La Transparence et l'obstacle*, p. 183 ; R. Morrissey, *op. cit.*, p. 145; *La Nouvelle Héloïse*, n. 1 de la p. 558, O.C. II, p. 1670 (par B. Guyon).
- 37) *La Nouvelle Héloïse*, Cinquième Partie, lettre III, O.C. II, pp. 559-560.
- 38) *Ibid.*, O.C. II, p. 564. Cf. Helvétius, *De l'Esprit*, « Troisième Discours », Fayard, 1988, chap. XXX, pp. 417-418.
- 39) *Ibid.*, O.C. II, p. 568.
- 40) *Ibid.*, O.C. II, p. 578.
- 41) R. Morrissey, *op. cit.*, p. 125.
- 42) *La Nouvelle Héloïse*, Cinquième Partie, lettre VII, O.C. II, pp. 603-604.
- 43) La Genèse, chap. 29-31, dans *La Bible de Jérusalem*, Les Éditions du Cerf, 1998, pp. 79-84 ; le Livre de Ruth, dans *ibid.*, pp. 425-429.

- 44) *La Nouvelle Héloïse*, Cinquième Partie, lettre VII, O.C. II, p. 603.
- 45) *La Nouvelle Héloïse*, Cinquième Partie, lettre II, O.C. II, pp. 547-548.
- 46) *La Nouvelle Héloïse*, Troisième Partie, lettre XX, O.C. II, p. 371.
- 47) *La Nouvelle Héloïse*, Première Partie, lettre XII, O.C. II, p. 59.
- 48) É. Gilson, *op. cit.*, p. 283.
- 49) *Émile ou de l'éducation*, l. IV, O.C. IV, p. 591.
- 50) *Ibid.*, O.C. IV, p. 603.
- 51) ルソーが『孤独な散歩者の夢想』執筆期に、独自の道徳観を支持し続けていたことは、『孤独な散歩者の夢想』の草稿からも確認される。「 Il est vrai que l'h[omme] le plus impassible est assujetti par son corps et ses sens aux impressions du plaisir et de la douleu[r] et à leurs effets. Mais ces impressions purement physiques ne sont par elles-mêmes que des sensations. Elles peuvent seulement produire des passions, même quelquefois des vertus soit lorsque l'impression profonde et durable se prolonge dans l'âme et survit à la sensation ; soit quand la volonté mue par d'autres motifs résiste au plaisir ou consent à la douleur ; encore faut-il que cette volonté demeure toujours régnante dans l'acte [*mot illisible*] car si la sensation plus puissante arrache enfin le consentement toute la moralité de la résistance s'évanouit et l'acte redevient et par lui-même et par ses effets absolument le même que s'il eût été pleinement consenti. Cette rigueur paraît dure mais aussi n'est-ce donc pas par [elle] que la vertu porte un nom si sublime. Si la victoire ne coûtait rien quelle couronne mériterait-elle [?] » (*Ébauches des Rêveries*, n° 2, O.C. I, pp. 1165-1166.)